



ピッポ新聞

2011

5

No.257

子どもの本専門店 ピッポ

ピッポ古書クラブ

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

東日本大震災と原発事故 から見えてきたもの

東日本大震災が起こって1か月半以上経ちました。次々に明らかになっていく被災の状況は、地獄絵を見ているようです。被災したみなさまのことを考えると言葉のかけようもありません。多くの命が失われ、多くの家や物が破壊され、多くの人や動物や自然が傷つき、それが未だ持続していることに心いたみします。

地震や津波などの災害は天災（自然災害・人災の部分も大いにありますが）と呼ぶのですが、地震発生から1か月半以上経つというのに、その行き着く先が見えずに続いているのが、福島原発の原発事故です。これは明らかに天災でなく人災です。その原因及び結果は、人間によってもたらされたものなのです。

人間は科学や社会（制度）の発展とともに次々に新しい「もの」を創りだしてきました。その多くはわたしたちに恩恵をもたらしてくれました。しかし、この国では「発展」を絶対視するあまりに、先に先に進むことを「正義」とみることになったように思います。立ち止まるうとしませんでした。

現在のわたしたちは、ものごとの起承転結を余り問題にせず、目に見える「結」の部分だけを享受しているのだと、前号の本紙で書きました

が、その最たるものが「原発」によって生み出された電力を限りなく消費し続ける生活ではないでしょうか。

いえ、原発の場合は「スリーマイル島」や「チェルノブイリ」の事故を経験していることで、漠然とは危険であることは認識されていました。ですが、官民上げた「日本の科学技術は世界最高だから、チェルノブイリのようなことは考えられない」とし、「安全対策は十重二十重になされているのだから、万が一の時でも絶対大丈夫である」という「安全神話」が、おおいっくしてしまいました。その結果、警鐘を鳴らしていた人たちの意見は後方に追いやられてしまったのです。

また「原発の『電力』は発電コストが一番安いし、化石燃料からつくる電力よりもクリーンである」と、電力会社と政府の喧伝に、わたしたちはだまされてしまったのです。

落ち着いて考えれば、「絶対に安全」なものに電力会社や政府が多額の原発交付金や税金（バラマキ）を出すはずありません。自動車生産工場を誘致したところで政府は「交付金」をだしますか？

原発のある自治体はおおむね公共施設はその地域に似合わず、とてつもなく立派であるが、その立派な施設と、自分たちの危険とを引き替えていたことを忘れてしまっていたようです。

つい最近のテレビニュースを、ぼくはもはやブラックユーモアとしか聞くことができませんでした。

「いわく、
「浜岡原発の6号機の建設工事は当面延期されることになりました。このため地元御前崎市(旧浜岡町)では本年度の交付金7億5千万円が入ってこなくなり予定していた×××の建設を中止することになりました」

「原発」は、受け入れ自治体には麻薬だ!

原発という存在は、麻薬にとてもよく似ていると思います。麻薬が依存性の強いことや、ついには人間を破壊してしまうことを知らない人はいないでしょう。

受け入れた自治体にとっては、交付金(電源三法交付金)や多額な税金(核燃料税・固定資産税)をもたらししてくれる原発は、麻薬そのものではないでしょうか。一度政府や電力会社の金を受け取ったら、それに依存し、その味をしめた自治体はさらに依存度を高め、金を求めるようになり、原発を断ち切ることができなくなってしまう。(これによって、自治体の会計は自立できなくなってしまうのです)

その結果が、今回の福島原発周辺自治体であり、住民の放射汚染からの避難です。浜岡の場合はすでに5号機まであり、さらに6号機の建設が、まさにはじめられようとしていた(今度の原発事故で着工が、延期されました)のです。7億5千万円はその見返りだったのです。もちろん交付金や税金は一回きりのものではありません。

福島第一原発も1〜6号機まですでにあり(さらに、7号機8号機が予定されていたが、今度の事故でその実現は不可能になるでしょう)、近くには福島第二原発もありますね。他の原発受け入れ自治体も同じです。そこにはすでに複数の原発が建っていますし、同じ場所に増設計画(たぶん建設は不可能になるでしょうが)も多くあります。

これを見ても分かるように、「原発の金」に一度手を染めた自治体は「やめられない!とまつらない!カッパえびせん」状態になってしまうのですね。

麻薬はやがて人間そのものを廃人にしてしまうように、原発も一度事故がおれば生活(命さえ)が根底から破壊されてしまいます。

福島原発の事故は、先祖から受け継がれてきた自然も、農業も、漁業も、住むところさえ奪ってしまいました。ひとたび事故が起これば半永久的に人が住めなくなる場所さえ出てくるなど、チェルノブイリの原発事故を見ていれば分かっていました。

誰がどのようた責任をとるの?

ところで、今回の事故の結果にいつたい誰が、どのように責任をとるのでしょうか? また、とれるのでしょうか?

このことが、ぼくはずっと以前から(原発建設問題が起こるたびに)気になっていました。というのは、チェルノブイリのそ

の後を注視していれば、原発をたやすく作ってはならないことなど簡単に想像できたのです。

ましてや、日本のような国土の狭い国に五十機を越える多くの原発作るなど、危険きわまりないことは自明だったのです。

その危険性は、ぼくのような素人でさえ想像できたのですから、専門家は危険を、そしてひとたび事故が起こればどのような状況になるのかも百も承知だったはずですよ。それでも原発建設を推進してきたのです。

安全だと言い続け原発を強引に推進してきた政府や電力会社、これを具体化した科学者や製造会社、それを誘致することに動いた政治家、電力会社や関連企業から宣伝費をたっぶりもらって「安全神話」をふりまいたメディアの責任者、彼らは一体今回の原発事故の責任をどうとろうというのでしょうか?

彼らは、今度も「想定外だった」と言い逃れてしまうのでしょうか。

まさかとは思いますが、東電は住民に補償金を出せば免罪されるとも考えているのでしょうか。

麻薬を売った人も、使用した人も刑罰を課せられるように、今回の事故に対して、過去に遡って、はっきりと責任者(個人)を特定して厳罰を課す(刑務所に入れる)必要があるとぼくは考えます。

そうでないで、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」人たちがこの国には多いですから、しばらくすれば、またぞろ建設をはじめてしまうことでしょう。

もちろん、これを許してきた私たちにも責任はあります。これについては後半で考えたいと思います。

福島原発事故は 何を我々に問うたのか

また、こんなニュースが、ぼくはとても気になりました。これを読んだり聞いたりしたのは、確か福島原発事故が起こって一週間くらい経ったころだったと思います。

今度の事故を受けて、中電は、浜岡原発の防波堤を十二メートル以上に嵩上げをするというのです。

しかし、ちょっと待ってくれとばかりは声を大にして言いたい！

今度の福島第一原発の事故は、例えば6メートルを想定していた津波の防波堤の高さを倍の十二メートルにすれば、それで事足りるすまされるものですか？次に十二メートルを越えたら、十五メートルにすればよいというのですね。自然はいつだって人間の才智をこえて予想外なのだ謙虚に考えないのでしょいか。

さらに驚くのは、福島第一原発がまだに事故処理のめどさえ立たないというのに、中電は浜岡原発3号機を7月に再稼働するなどと言いつ出したのです。(4月29日のニューズによる)このようなことをいとも簡単に言い出す中電にこそ市民は、不信感と不安感を強く抱くようになっていくのです。

このことに考えが至らない中電はあまりにも無神経すぎます。いわば中電は今度の

事故からなにも学んでいないし、学ぼうともしていないのです。謙虚さのカケラもなく、驕り体質そのままのことです。もちろん、可能な限りの安全対策は当然のことです。

東海・東南海・南海大地震が同時に起こる可能性を指摘されている地域にある、原発の中で一番危険だと言われている浜岡原発の最大で唯一の安全対策は、いまある原発をただちに止めることなのです。

今度の原発事故は 日本人の来し方を問い、 行き先が問われている のではありませんか！

美しさや喜びを与えてくれるのも自然ですが、時には恐ろしい存在ともなるのです。地震や津波は自然そのものであり、そのなかでくらししていることを、現在を生きるわたしたちは忘れてしまったようです。いえ、忘れたのではなく、人間の力でなんとかできると考えたのです。その結果が、原発事故だったのでありませんか。

私たちの先人は、今度のような災害に苦しめられながらも、自然に畏敬を抱き、よく観察し、その知恵を(昔話や伝説などにして)伝えてきました。

いつしか、人間はこれを制圧できると思いきや、いこんでいたのです。地震や津波の発生は誰も止めることができません。ひとたび起これば今回のような未曾有の被害だつてもたらされます。だれにも制御できない原発

事故は、その土地に古くから住みくらしていた人たちの住居さえ奪ったのです。そこには自然に対する畏敬や謙虚さなど存在しませんでした。

電力エネルギー(消費電力のほとんどが他所から来ている)をはじめ、ありとあらゆるものを消費しつくしている大都会東京の人びとの多くは、その電力の一部が福島県原発でつくられていたことに思いがたりませんでした。

ここでも起承転結の結の部分だけを享受していた(させられていた)現代人の姿がありました。東京一極集中(他の大都市も)と地方の過疎化の弊害も、今回の大災害を引き起こした大きな原因でした。

ことが起こって、はじめて人びとはいまさらながらと、多くのことに気付かされたのです。

今回の地震や原発事故は、私たちの今後問うているのです。

動物学者の今泉吉晴氏は月刊誌『望星』5月号の「緊急手記」で、

.....

原子力発電所が未来の津波の大きさを想定するには、十分な観測データが必要だ。想定外の津波の来襲は、津波(自然)の観測(観察)が不十分だったことを意味します。自然はその構成要素が複雑に関連しあつてどこまでも広く深く、見る人の世界観を常に越えます。すなわち自然はいつでも以外です。そこで人は

自然を見て、人間社会の垢にまみれた世界観を新たにできません。想定外の津波があることは自明でした。

今泉氏は今度の地震のとき、岩手の北上山地（大船渡や陸前高田から二十キロ圏内）の自分の山小屋から森や動物を見ていたそうです。そのことを、こう綴ります。

……、森も動物もふだんのくらしをみだしてはいませんでした。たとえば、余震のときに姿をあらわしたヒヨドリは、枝にとまって地震の揺れを感じると、あたりをうかがうしぐさを見せたものの、揺れがおさまると、いつもの表情にもどりました。

動物学者であり、一人のナチュラリストである今泉氏は、自然を仲立ちにして物事を見、そして考えます。私たちの先人や、世界の多くの先住民もまた、自然に寄りそつてものを見、考え、生きてきました。この姿勢こそ、わたしたちが失ったものだったのです。今泉氏はこう結んでいます。

……大地震は必需品の不足をもたらしました。人のくらしが地域の自然と産業から離れていたからです。

大地震は人に、市街地の適切な選定をはじめ、自然との関係をとるもどすよう

求めています。しかし、大地震には、原発事故という歴史的な事件がくわわり、放射性物質の放出により生物のくらしを破壊しました。

政府はこの新たな重大事に触れようとしません。原発は人と生物（自然）を差別する思想になっていきます。もし、私の山小屋が退去の対象になったら、私は政府がクマ、カモシカ、リスなど自然の隣人を差別するかぎり、退去を拒否します。

事故以来多くの情報や意見が飛び交う中、この今泉氏の「手記」に接したとき、ぼくは大いに落ち着き、これからの進むべき方向を考える場合の礎になるものだと思います。

安全かつ、クリーンでエコノミーな電力を生み出すはずの原発の事故が、人や自然に災厄もたらしたのです。

もはや、今後どれだけかかるかわからないほど多額な補償金を強いられる原子力発電が、安いエネルギーなどとは誰も思わなideしよう。すでに電力料金の値上げがささやかれている。

もはや、放射能汚染のため、多くの人を地域から追いやった原発が、クリーンエネルギーなどと誰も考えないでしょう。

現代に生きる私たち（人間）は、今ある地球（自然）をこれ以上痛めることは許さ

れないでしょう。そのためにこそ、これまで得た科学知識を生かして、未来の人びとに手渡す義務があると思います。

思い出すのはバージニア・リー・バートの絵本『せいめいのれきし』（岩波書店 1680円）です。絵本は芝居仕立てで、宇宙のなかの太陽や地球の誕生を明かし、さらに進めて生命の誕生を語り、長いながい時を経て人間の誕生を語り、現代までを描いています。

人間の歴史など宇宙の時間からみればほんのわずでしかありません。そのわずかな歴史の時間しかもたない人間が、今やともに住む動物や植物の生命を含めて、地球を危うくしているのです。私たちは健全な地球を未来へ引き継ぐ義務があるのです。しかし、現代の人間文明がそれを不可能にしてしまうかもしれません。

絵本は地球のすばらしさを、こう結びます。

さあ、このあとは、あなたがたのおはなしです。その主人公は、あなたです。ぶたいのよじは、できました……。

いますぎていく一秒一秒が、はてしない時のくさりの、新しいいわです。いきものを演ずる劇は、たえることなくつづきーいつも新しく、いつもうつりかわって、わたしたちをおどろかせます。